

境界としての「坂」

——神話的空間からの脱却——

後山智香

序

一、先行研究から浮かび上がる問題点

二、〈国〉の境界として在る「坂」

三、拒絶される葦原中国

結

『古事記』には、後に「天下」となる葦原中国と異界との間に二種類の「坂」が存在している。それは「黄泉ひら坂」と「海坂」であるが、いずれの「坂」も異界に赴く際は問題にされず、属する〈国〉に戻る段階においてようやく登場するという特徴を持つ。それには〈国〉作りという問題が大きく関わってくる。なぜなら天皇の世界Ⅱ「天下」を指向する『古事記』の世界観では、異界との関わりはその上においてしか意味をなさないからだ。そしてそれは異界との境界である「坂」も同様である。

本稿では『古事記』における異界との間に存在する「坂」の意義を〈国〉作りという観点から見ていくことで、境界としての「坂」は、上巻の神話的空間から脱却し、後の「天下」を指向する『古事記』にとって必要不可欠な〈国〉作りの一部であったことを論じていく。

序

『古事記』には葦原中国、高天の原、黄泉、根の堅州国、綿津見神の宮、常世などの複数の〈国〉が存在し、「うつき青人草」が住む葦原中国を中心として、その葦原中国と接続する形でそれぞれの〈国〉が描かれる。しかし、〈国〉は無媒介に葦原中国と隣り合っているわけではなく、そこには境界が存在し、葦原中国と〈国〉を接続しているそれは「黄泉ひら坂」と呼ばれる黄泉・根の堅州国との間に存在する「坂」であり、綿津見神の宮との間に存在する「海坂」である。いずれも「坂」とついた地形的な名称が与えられ、また、どちらも物語の中で塞がれてしまう「坂」だ。その上で、葦原中国との関係性を語る。

その関係性とは、つまり『古事記』の世界観である。『古事記』上巻には前述の複数の〈国〉と呼ばれる異界が存在し、それらと葦原中国との往来を語ることで『古事記』上巻をひとつの神話的空間として描いている。神野志隆光は、「高天原」であれ「葦原中国」であれ、個別的にそれ自体としてありうるのではない。諸世界のかかわりあいのなかで世界像として意味をもつ^①として『古事記』の世界像を示し、そのように『古事記』の世界観を把握する。また、毛利正守は『古事記』の主題を「最もシンプルなか

たちで言うならば、「天の下」という現実の世界を統治する天皇の連綿として続くその皇統の在りようを物語るところにある」として、『古事記』に登場する異界を「葦原中国を中心にして立体的な広がりの中で意識的に構想された世界^②」と捉えている。

このように『古事記』の〈国〉を把握する際、最も重視されなければならないのは『古事記』はあくまで葦原中国を中心として描かれたものであり、その他の〈国〉は葦原中国との関係性においてしか存在しないという視点である^③。以上のような視点で〈国〉の境に存在する「坂」を把握する場合、あくまでそれも葦原中国という、後に「天下」となるべき〈国〉を規定するための空間として捉えることができるのではないだろうか。

本稿では『古事記』における「坂」の意義を世界観という観点から捉え直し、『古事記』をより立体的な把握に導きたいと考えている。その中でも今回は上巻の最後に配置される「海坂」を中心に取り上げることで「坂」が世界観にどのようにかわるのかを見ていきたい。

一、先行研究から浮かび上がる問題点

上巻の最後で「即塞海坂而、返入」と登場する「海坂」について『日本古典文学大系』（岩波書店、一九五八年）

は「海神の国とこの国との境界。この国と黄泉国との間に黄泉平坂があると信ぜられていたのと同様に、海神の国とこの国との間には海坂があると信ぜられていた。万葉巻九の浦島子の長歌に「水の江の、浦の島子が：海界を、過ぎてこぎ行くに、わたつみの、神の女に、たまさかに、いこぎ向ひ」（二七四〇）とあるのが参考となる。」と説明している。また、『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九七年）でも「坂」は「黄泉ひら坂」の場合と同じく世界の境界を意味する。海の世界と葦原中国とを区切る「坂」がどのようなものかは、具体的には分らない。『万葉』に「海界うなさかなを 過ぎて漕ぎ行くに」（一七四〇）とあり、海の彼方にあると考えられる。」と、ほぼ同義の説明を行っている。この点に関しては、本居宣長も「坂は堺の義にて、海神の国と、此上国との間の、隔ある処を云」とし、『万葉集』一七四〇の「海界も、此と全同」としていた。

そこで次に『万葉集』一七四〇を見てみたい。

（前略）水江の 浦島子が 鯉釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも来ずて 海界を（海界乎） 過ぎて漕ぎ行くに（過而榜行尔） 海神の 神の娘子に たまさかに い漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり （後略）

右のように浦島子が「海界」を「過ぎて漕ぎ行く」ことで「海神の神の娘子」に出会い「常世」に至るとある。この歌を見る限り、頭注で説明されているようにこの世界と常世との間に存在する堺のようなものとして考えられていたことはうかがえる。

しかし、『万葉集』一七四〇の「海界」と『古事記』の「海坂」をそう簡単に接続してよいものだろうか。そもそも原文において『万葉集』は「海界」とし、一方の『古事記』は「海坂」と表記する。そこにはまず表記上の差異が存在しているのだ。両者を比較する際には、その差異が問われなければならないだろう。

この点に関して『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂、一九六七年）は「海坂」という項目を設けていない。辞典では個別に「海」と「坂」と説明されるだけとなっている。その一方で、各頭注にあげられた『万葉集』一七四〇で用いられる「海界」については「海の見渡される限界。海の結果。」と項目を設けて説明する。^⑤宣長の言うように「坂」は堺としてあったのだろうが、ではなぜ『古事記』は「界」ではなく「坂」を用いるのだろうか。

そもそも『古事記』中に「界」の字は見られず、「堺」の字を用いて以下の3件の使用が見られるのみである。上巻にイザナミの葬られた土地の説明として「出雲国と伯伎

国との堺の比婆之山に葬りき（葬出雲国与伯伎国堺比婆之山也）」とあり、中巻では孝元天皇の宮があった地として「輕の堺原宮（輕之堺原宮）」がある。また同じく中巻に成務天皇の事績として「国々の堺と大忌県・小忌県の県主とを定め賜ひき（定賜国々之堺及大忌・小忌之県主也）」とある。孝元天皇の宮の所在地を示す「堺原宮」以外の2例は、いずれも土地を区切る境い目の意味で使用されていると見てよいだろう。

一方、「坂」は53件の使用例があり、姜鍾植はそれらを分析し「坂」の機能を「境界」「通路」「要塞」「呪的な場（祭祀の場）」の四つに分類している。その上で「海坂」を次のように説明する。

葦原中国と海宮との間は本来ならば、傍線E（「恒は海つ道を通して往来はむとおもひき」、引用者注）の如く、「海つ道」を通って往来できるはずなのに、傍線F（「すなはち海坂を塞へて返り入りましき」、引用者注）の如く、豊玉毘売が「海坂」を塞ぐことによって「海つ道」は閉ざされてしまい、両世界の間は行き来ができなくなることである。それは、この部分に該当する日本書紀（第十段一書第四）に、「此、海陸相通はざる縁なり」とあることから窺われる。すなわち、「海坂」とは、海宮と葦原中国とを結ぶ唯一の通

路だったのである。⁽⁶⁾

以上のように「唯一の通路」と氏は述べるのだが、それであればトヨタミメが「海坂」を塞いだ後の二国間の往来は閉ざされてしかるべきである。しかし実際はその後、妹のタマヨリビメが子どもの養育のためにホヲリノミコトのもとにやってくるおり、二国間の往来は閉ざされていない。また『日本書紀』の「此、海陸相通はざる縁なり」という文言はあくまで『日本書紀』における海と陸とについての説明であり、『古事記』の文脈にそのまま流用することは難しいのではないだろうか。

この姜が乗り越えられなかった塞がれた後の二国間の往来について、村上桃子は「塞」の用例を通して分析し、次のように述べる。

「塞」は通行を止めるだけでなく、夫婦関係において、その離別を決定づけるものとしてはたらく。（中略）あくまで見るなの禁を犯した火遠理命に対し、これ以上共に暮らすことはできないという豊玉毘売命の拒絶の表現としてあるがゆえに、「塞」の対象は火遠理命にのみ限られ、他者の通行とは関わらず、支障をきたさない（中略）海原訪問譚では、両世界は親和的でありつつ、豊玉毘売命は海坂を塞いで帰っていく。しかしその後にも両世界の交流は描かれ、通行は可能のま

まとなる。^⑦

右のように捉えた上で、「海坂」に「世界と世界をつなぐもの」という世界の一機構として捉え得る一方で、場面性に要請された表現である。神々との関係といった点からみれば、古事記の異郷とのあいだの坂はつなぐための坂ではなく、むしろ別れるための坂」という二面性を見出す。

しかし、「海坂」が「世界と世界をつなぐもの」という意味をもって『古事記』内に置かれるとき、「神々との関係」を夫婦間の問題に終始させることに問題はないだろうか。

前述したように、『古事記』上巻はあくまで葦原中国の成立について語るものであり、その他の〈国〉は葦原中国との関係性の中でしか存在しえない。世界と世界をつなぐ機構として固有名詞まで与えられた「坂」が上巻の最後に登場すること、そのことはとうてい無関係であるとは思えない。つまり、「坂」も同じように世界観の中で把握する必要がある、その上で「坂」という機構が選択されているということだ。

二、〈国〉の境界として在る「坂」

『古事記』の「海坂」は上巻の最後のホヤリとトヨタマビメとの離別の場面において登場してくる。

是に、海の神の女豊玉毘売命、自ら参み出でて白ししく、「妾は、已に妊身みぬ。今、産む時に臨みて、此を念ふに、天つ神の御子は、海原に生むべくあらず。故、参み出で到れり」とまをしき。爾くして、即ち其の海辺の波限にして、鵜の羽を以て葦草と為て、産殿を造りき。是に、其の産殿を未だ葺き合へぬに、御腹の急かなるに忍へず。故、産殿に入り坐しき。爾くして、方に産まむとする時に、其の日子に白して言ひしく、「凡そ他し国の人は、産む時に臨みて、本つ国の形を以て産生むぞ。故、妾、今本の身を以て産まむと為。願ふ、妾を見ること勿れ」といひき。是に、其の言を奇しと思ひて、窺かに其の方に産まむとするを伺へば、八尋わにと化りて、匍匐ひ委蛇ひき。即ち見驚き畏みて、遁げ退きき。爾くして、豊玉毘売命、其の伺ひ見る事を知りて、心恥しと以為ひて、乃ち其の御子を生み置きて、白さく、「妾は、恒に海つ道を通りて往来はむと欲ひき。然れども、吾が形を伺ひ見つること、是甚忤し」とまをして、即ち海坂を塞ぎて、返り入りき。

右に見るように、トヨタマビメは出産のために「天つ神の御子」であるホヤリのもとを訪れるが、出産に際し「妾を見ること勿れ」という禁止事項を課す。それを不審に思

ったホヲリは出産を覗き見、巨大な「八尋わに」になったトヨタマビメを目撃し「見驚き畏」み「逃げ退」く。見られたことを知ったトヨタマビメは「恥」て、生まれた子供を葦原中国に置いて「海坂」を「塞」いで綿津見神の宮に戻る。

この話は一見するだけでイザナキ・イザナミの黄泉の話との類似が見て取れる。いわば見るな禁の形式に則った類話のひとつである。⁸なおかつ、その形式のみならず、両者とも異界訪問譚という特徴を持ち、また〈国〉の間に存在するらしき「坂」が「塞」がれるという結末すらも同じ運命をたどる。

しかし、この話で重要な点は、この「海坂」がそれ以前にホヲリが綿津見神の宮と葦原中国を行き来している際には登場せず、また、トヨタマビメが出産のために葦原中国に「自ら参る出でて」いる際にも登場していないということだ。「海坂」が登場するのはトヨタマビメが自らの〈国〉に「返り入」る時であり、それ以前の登場はない。つまり、登場と同時に「塞」がれてしまう存在であり、そこに意味があると見るべきであろう。

このように、それぞれの〈国〉の往来の際には問題とされず、離別の際のみの登場であり同時に「塞」がれる。その点において、村上の「別れるための坂」という指摘は正

しい。⁹そしてこれは〈国〉間に存在する「坂」に共通の事項であると言ってよい。次に引用するのは、イザナキの異界訪問譚である。

是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。爾くして、殿より戸を膝ぢて出で向へし時に（中略）爾くして、御佩かしせる十拳の劔を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。（中略）最後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引の石を其の黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」といひき。（中略）亦、其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞り坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。

イザナキによる黄泉の訪問譚では、「相見む」と思ったイザナキは、何かを経由することも遮られることもないまま黄泉にイザナミを「追ひ往」くことができている。そうして無条件・無媒介に行くことのできた黄泉の筈だが、見るな禁を破ったイザナキが黄泉から逃げ戻る際には「黄

泉ひら坂」が現出する。この「坂」において黄泉の軍勢は追い払われ、また、「坂」自体が「千引の石」でもって「塞」がれたために、イザナミは「事戸を度す」時に「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」と言うのみとなり、それより追ってくることはない。結局、追ってきた黄泉の側のものは、すべて「坂」を超えてくることはない。

それは「黄泉ひら坂」を共有する根の堅州国も同様である。オホアナムヂは「八十神」に追われ、逃げ込んだ先の「木国の大屋毘古神」の「須佐能男命の坐せる根堅州国に参る向ふべし。必ず其の大神、議らむ」という言葉に従い、「故、詔命の随に、須佐能男命の御所に参る到り」とスサノヲが存在する「国」へ無媒介に訪れている。そしてその帰郷の際はやはり逃げ出しており、それに気づいたスサノヲが追いかけるが、すでにオホアナムヂは「遠く逃げき」であり、スサノヲは「故爾くして、黄泉ひら坂に追ひ至りて、遙かに望みて、呼びて大穴牟遲神に謂ひて曰ひしく」と、突如、登場した「黄泉ひら坂」から呼びかけるのみとなっている。やはり、その「坂」を超えて追いかけてくるようなことはない。

つまり、訪問者が異界に赴き、そこから追われて自分の所属する葦原中国という「国」に逃げ戻る際に「黄泉ひら

坂」は登場するのである。なおかつ、追う側は「黄泉ひら坂」の所までやってはくるが、「塞」がれる、もしくは「塞」がれているがゆえに、それを超えて追いかけてくることはない。それは「坂」というものが異界や外部のものに対して、超えることの不可能な「国」の境界として存在しているためと考えられる。また、根の堅州国においてはそれがより顕著である。それというのも、根の堅州国の「黄泉ひら坂」はスサノヲの前にしか現出していないからだ。スサノヲが逃げるオホアナムヂに気づいて追いかけた時はすでに「遠く逃げき」であり、オホアナムヂの逃げた先を「黄泉ひら坂」において「遙かに望」むだけである。

ここで一度、この「国」の境い目における神々の行動に注目したい。そもそも最初に登場する異界訪問譚で「黄泉ひら坂」においてイザナキが黄泉の軍勢を追い払うという行動を行うことで、黄泉側は追えなくなる。またイザナミをそこで立ち止まらせるためには「千引の石」で「坂」を「塞」ぐ必要があった。それは「塞」がれなければ「坂」を超えてくる可能性もそこには存在しているということである。「塞」がれているからこそイザナミは「石を中に置いてイザナキと相対するのである。

一方で、スサノヲはすでに塞がれている「黄泉ひら坂」とはいえ「遙かに望」むにとどまる。そこは「坂」が

「塞」がれ、すでに境界としての効力を発揮しているためとも取れるが、それであれば「黄泉ひら坂」でオホアナムヂと相対しても越えられない境界としては存在するわけであり、そこに「遙か」な距離は必要ではない。しかし『古事記』はスサノヲに「遙かに望」ませており、両者の間に大きな隔たりや距離のようなものを存在させている。これはイザナミとイザナキが「千引の石」を挟んで対峙していた姿とは全く異なるものだ。〈国〉の間の「黄泉ひら坂」という越えられない境界を挟んでのこの場面の違いは一体どこから生じているのかについては後述するが、そもそも境界という概念をどうとらえるかという点について、三浦佑之は次のように述べる。

〈境界〉という概念は、共同体において「外部」を認識することによってはじめて存在する。ということとは、逆に、〈境界〉が「内部」を存在させるということである。そういう意味で、境界を論じるということは共同体そのものを論じることになる。¹⁰⁾

その上で「へ坂」とは、本質的な差異をもたらず内部と外部との接点というべき空間」と氏は説明する。この意見を踏まえると、「黄泉ひら坂」という境界は葦原中国という「内部」を存在させるものであると規定できる。そして〈国〉間の「坂」がそのような境界の意味を有して各訪問

譚の最後の場面に配置されるとき、上巻最後の「海坂」はどのようなみえるべきなのだろうか。

その際、前述した『古事記』上巻は「天下」となる〈国〉を形作っていく物語であるという視点は重要である。なぜなら異界との関わりはその限りにおいて意味を捉えるべきであり、〈国〉間に存在する「坂」もその中で把握することが必要とされるからだ。つまり、上巻最後に登場する「海坂」は『古事記』の〈国〉作りの物語として重要な意味を有する「坂」なのである。

三、拒絶される葦原中国

本節において注目したいのは、「海坂」と「黄泉ひら坂」とは葦原中国と異界の堺に存在し、「塞」がれる「坂」という条件は同じだが、「塞」ぐ主体が異なっているという点だ。「黄泉ひら坂」はイザナキによって「塞」がれる、葦原中国側が提示する「坂」であり境界であるが、「海坂」は禁忌を破ったホヤリに対して提示された「坂」であり、「塞」ぐのは異界の存在であるトヨタマビメとなっている。その「坂」を超えることができないのは葦原中国側なのである。

そもそもホヤリによる綿津見神の宮訪問はその往來の仕方からして、黄泉・根の堅州国とは異なっている。次に、

挙げるのは綿津見神の宮へのホヲリの訪問の場面である。

泣き患へて、海辺に居りし時に、塩椎神、来て、問ひて曰ひしく、「何ぞ、虚空津日高の泣き患ふる所由は」といひき。(中略)爾くして、塩椎神の云はく、「我、汝命の為に善き議を作さむ」といひて、即ち無間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひしく、「我其の船を押し流さば、差暫らく往け。味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往かば、魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到らば、傍の井上に湯津香木有らむ。故、其の木の上に坐さば、其の海の神の女、見て相議らむぞ。」といひき。故、教の随に少し行くに、備さに其の言の如し。即ち、其の香木に登りて坐しき。

ホヲリが兄の釣り針を海で無くし、返却を求められ途方に暮れていた所へ、塩椎神という綿津見神の宮に属する神が「我、汝命の為に善き議を作さむ」と「無間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて」と助力を申し出、ホヲリはその「教の随」に行動することで綿津見神の宮を訪問することが出来る。つまり、訪れるには異界の助力が必要とされているのだ。また、葦原中国に戻る時も以下のような。

「今、天津日高の御子、虚空津日高、上つ国に出幸さ

むと為。誰者か幾日に送り奉りて覆奏さむ」といひき。故、各己が身の尋長の随に、日を限りて白す中に、一尋わにが白ししく、「僕は、一日に送りて即ち還り来む」とまをしき。故爾くして、其の一尋わにに告らさく、「然らば、汝、送り奉れ。若し海中を度らむ時には、惶り畏らしむること無かれ」とのらして、即ち其のわにの頸に載せて送り出だしき。故、期りしが如く、一日の内に送り奉りき。

帰りたいと願うホヲリは、海の神が一尋わにに送らせることで〈国〉に戻る。つまりホヲリは訪問者でありながら、異界の側の協力がなければ、異界を往来することができないのだ。

ここで他の異界訪問者を見てみたい。最初の異界訪問者であるイザナキは「相見むと欲」だけで、黄泉を訪れることができていた。次のオホアナムヂはオホヤビコの「詔命の随」にスサノヲのもとに行く。一見するとホヲリの場合と同じように助力によって異界を訪問しているように見えるが、二者において大きく異なるのはオホアナムヂの場合は〈国〉を訪れる手段が示されていないという点である。「詔命」に従いつつ、方法としては自力で訪れることができたのだ。また、イザナキ、オホアナムヂはそれぞれの〈国〉から脱出する際に境界の「黄泉ひら坂」が登場して

くるが、その境界が境界として効力を發揮するのは追う側に對してであつて、追われる葦原中国側はその境界を無條件に超えていく。

しかし、ホヲリの場合は往來に際して異界の綿津見神の宮の助力を必要としており、無条件で訪れることができないなつてゐる。この異界間の往來にもともと境界が存在しないのは綿津見神の宮側なのだ。そのため「海坂」はトヨタマビメによつて「塞」がれ、葦原中国側からは超えることのできない境界となつてしまふのである。そして、もとより境界が存在しない綿津見神の宮側には、根の堅州国を無条件で訪れるオホアナムデと同様に「坂」の境界としての効力は發揮されないため、タマヨリビメは「塞」がれた後でも葦原中国に來ることが可能となる。

また、村上は「塞」を「夫婦や親子であつた神々が離別」する義とし、「葦原中国と海原は隔絶したものと捉える必要はな」く、「のちの神々の通行に影響を及ぼさない」として、稻米命が「妣の国と為て、海原に入り坐しき」を問題がないとしている。¹²しかし、ここにおける稻米命が向かう「妣の国」とはトヨタマビメの〈国〉と同じ〈国〉なのだろうか。¹³

トヨタマビメは出産に際しホヲリのもとを訪れ「天つ神の御子は、海原に生むべくあらず」と自身の〈国〉が海原

にあることを明確にするが、「海坂」を「塞」ぐ時に「海つ道を通りて往來はむ」と二国間を往來して通おうとしていたとする。一方の〈国〉はホヲリの属する葦原中国で間違いない。問題となるのは「海つ道」を通つた先にあるもう一方の〈国〉である。もう一方の〈国〉とはどこをさしているのか。注目すべきは「海つ道」という道である。

この「海つ道」は二つの〈国〉の間に存在し、〈国〉同士をつなぐ道である。そしてその存在は塩椎神がホヲリに助力する場面においてすでに記されていた。塩椎神はホヲリを船に乘せ、「味し御路」に乘れば「魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮」にたどり着くと教えており、葦原中国と綿津見神の宮をつなぐ海上の道がここで提示されている。また、ホヲリが綿津見神の宮においてトヨタマビメと婚姻し「三年に至るまで其の国に住みき」と綿津見神の宮を「国」と呼ぶことから綿津見神の宮をひとつの〈国〉と捉えていることも明確だ。つまり、海の神の娘であるトヨタマビメが往來しようとしていた〈国〉同士は葦原中国と綿津見神の宮とみられる。トヨタマビメはその「海つ道」とは別に存在する「海坂」を「塞」ぐことで葦原中国側の來訪を拒絶して「返り入りき」と自身の属する綿津見神の宮に返つてしまふ。「海坂」という境界によつて葦原中国を拒絶するのは綿津見神の宮という〈国〉なのである。

しかし、注意されるのはこの綿津見神の宮はトヨタマビメ自身の「天つ神の御子は、海原に生むべくあらず」という言葉によって、綿津見神の宮が海原に属するものであるということも示されている点である。葦原中国側は綿津見神の宮に赴くことはできなくなるが、海原への往来は拒絶されていないのだ。そのため上巻の最後に稻氷命が「妣の国」として海原へ赴くことが可能となっている。

前述したように、この異界訪問譚は、それまでの訪問譚と異なり、葦原中国側が異界から拒絶される形で終了する。しかし、そもそも葦原中国側が往来する際に異界の助力が必要であるなど、訪問に際して障害とまではいかないまでも、何らかの条件が必要とされており、異界へは簡単にたどり着けなくなっている。そして異界の綿津見神の宮側から「海坂」という境界をひかれる形で終了する。

異界訪問譚は〈国〉作りの文脈におくことが重要であると先にも述べているが、境界としての「坂」は三浦が述べるように、外部を意識することで内部を存在させるものである。^⑬〈国〉作りにおいてその視点は極めて重要であり、その文脈に「海坂」を配置すると、葦原中国を「天下」へつなげようとする意図がそこに見て取れる。上巻の最後で異界へは異界の協力が無いと往来できず、しかも「海坂」という境界が存在することでそれはほぼ不可能となった。

葦原中国は「天下」を指向しており、そのための秩序を必要とする。^⑭つまり、それは神話的世界観からの脱却であり、天皇支配の「天下」へと移行していくという一つの〈国〉作りなのである。

結

「坂」は物語の終盤に登場し、そして塞がれることで、外部のものからは明瞭な境界としてその侵入を阻み〈国〉の領域を表明するものだ。「黄泉ひら坂」は葦原中国側のイザナキが「塞」ぐことで「黄泉ひら坂」を媒介する黄泉や根の堅州国といった異界側から認識しうる境界となった。一方で「海坂」は〈坂〉を塞ぐのは異界側のトヨタマビメであるため、綿津見神の宮側の境界とはなりえず、「海坂」という境界が生じた後でもタマヨリビメは葦原中国へとやってくる。こうして黄泉との間に境界ができることで葦原中国は生死の境目が明瞭になり、「海坂」があることで本来の姿すら異なる綿津見神の宮に入っていくことができなくなった。これらは人の住む空間としての「天下」となるには必要不可欠な秩序であり、いわば〈異界〉の「坂」によって〈国〉作りが行われたということだ。

また、境界としての「坂」が最初に登場する黄泉では「黄泉ひら坂」においてイザナキ・イザナミは相対してお

きものとして描かれたのだ。

注

(1) 神野志隆光「第三章『葦原中国』——神話的世界の基軸——」

『古事記の世界観』吉川弘文館 一九八六年

(2) 毛利正守「古事記構想論」『古事記の現在』笠間書院 一九九九年

(3) 拙稿「日本神話における〈異界〉との関係性——葦原中国の世界観をめぐって——」『京都語文』第15号 二〇〇八年十一月

(4) 『日本書紀』雄略二十二年秋に「丹波国の与謝郡の筒川の瑞江浦嶋子」の記事があるほか、『丹後国風土記』逸文にも「浦嶋子」の話がある。それぞれ海上から「蓬萊山」、「蓬山」という神仙郷に行く異郷訪問譚として語られる。

(5) その他、事典や注釈において次のように説明される。
『萬葉集事典』（平凡社 一九五六年）、うなさか（名）：海上のさかひ。海の果。
『角川古語大辞典』（角川書店 一九八二年）、海のかなたにあると信ぜられていた「わたつみ」の国との境界。「さか」は異郷との境の意で、「よみ」の国との間に「よもつひらさか」があったように、「うなさか」の存在が考えられている。

り、次の根の堅州国ではスサノヲは「黄泉ひら坂」からオホアナムズを「遙かに望」む。そして綿津見神の宮はそもそも葦原中国側からは異界の助力なしで訪れることの不可能な異界としてあり、「海坂」が「塞」がれることで綿津見神の宮側が葦原中国から離れていく。つまり葦原中国側からすればもともと簡単に行くことのできない異界であるのに、なおかつ異界の側から拒絶をされるということだ。

このように『古事記』上巻を見ていくと、話の進行に合わせてそれぞれの〈国〉と葦原中国との間の距離が段階的に広げられていつていることが分かるだろう。それは「うつきき青人草」が住むための「天下」としての秩序を構築するためである。

こうして〈国〉同士の関わりを語る異界訪問譚の終盤にそれぞれ境界の「坂」を登場させることは、〈国〉の領域を明確化しようとする試みのひとつだったといえる。その「坂」が「天下」を指向する葦原中国の〈国〉作りの文脈に布置されることは、天皇が掌握しようとする〈国〉に關しての物語に必要とされたからだ。境界の「坂」は、「天下」を現実の天皇まで繋げるという意志のもと、リアリティの追及から要請されたものと見る事ができるだろう。境界の「坂」とは、ある意味において現実世界を指向する『古事記』というテキストの世界観において把握されるべ

『日本うたことば表現辞典 叙景編』（遊子館 一九八八年）、うなさか【海界・海境】海の果、海と空の交じわる水平線のあたり。古代では、海神の国との境と考えられた。
『日本国語大辞典 第二版』（小学館 二〇〇一年）、うなさ

か【海境・海坂・海界】上代、海上にあると信じられていた、海神の国と人の国との境界。海のはて。

『古事記注釈』（西郷信綱 平凡社 一九七六年）海神の国とこの国との境、サカはサカヒのこと。

その他注釈を散見しても、宣長以来『万葉集』の「海界」と『古事記』の「海坂」を共通の概念とみる見方は通底している。

(6) 姜鍾植「古事記の境界論―「坂」を中心に―」『東アジア研究』第27号 二〇〇〇年二月

(7) 村上桃子「葦原中国と海原―「塞」「海坂」をめぐる―」『古事記年報』49 二〇〇七年一月

(8) 『古事記』に見られるこの種の話は、イザナキ・イザナミの他に、当該のホリリ・トヨタマビメ、ホムチワケ・ヒナガヒメなどがあるが、いずれも女性の正体を知った男性が相手を「畏」み、「逃」げだして結果的に別れるという形をとっている。注(5)『古事記注釈』において西郷は「説話上の、つまり見るなどといったのに見てしまい、それがため何か決定的な事件が起きるという、説話上の技法の一つ（中略）徒らな好奇心は持つべきでないとする共同体のモラルがそこにある」として、「古代における物語の構成は定式化しており、要は定式のなかでのいいかえ、または単位の結合のさせかた」とこれらの類話について述べる。

(9) 注(7)に同じ。

(10) 三浦佑之「境界―「坂」をめぐる―」『万葉の歌と環境』笠間書院 一九九六年五月

(11) 塩椎神の所属については、ホリリに対して、後に登場する海の神と同じ「虚空津日高」という呼びかけを用いることか

ら察せられる。

(12) 注(7)に同じ。

(13) 〈国〉としての明瞭な名称をもたない海原だが、概念上は〈国〉として扱うべきである。最初に海原の文字が見えるのは三神の分治だが、その際、高天原、夜之食国と並列させられている。また統治を命じられたスサノヲが、統治を放棄している場面において「国を治めずして、八拳須心前に至るまで、暗きいさちき」とある点からも〈国〉としての海原がうかがえる。

(14) 注(10)に同じ。

(15) 拙稿「〈国〉作りの物語―『古事記』における〈国〉作りの内実―」『京都語文』第16号 二〇〇九年十一月

付記

『古事記』『万葉集』本文の引用は『小学館新編日本古典文学全集』によった。また、本居宣長の引用は『本居宣長全集』（筑摩書房）による。なお、適宜旧字は新字に改めた。

本稿は、二〇一六年度佛教大学国語国文学会（第二十一回）大会での口頭発表に基づくものです。会場内外で貴重なご教示を賜った諸氏に感謝を申し上げます。